

博士学位論文

日本中世の荘園制と住人の生活空間

朝比奈 新

【目次】

序章 本論文の視角と概要

第1節 本論文の視角と課題

- 1 前提となる研究史
- 2 領域論と立荘論
- 3 景観復原論と考古学の成果
- 4 宗教的イデオロギー支配論
- 5 三つの研究史の課題と本論文の関係
- 6 研究方法

第2節 本論文の概要

注

第1部 住人間による山野紛争と領域型荘園の成立

第1章 山城国禪定寺荘の領域画定と地域

はじめに

第1節 禪定寺荘の構造と周縁地域

- 1 禪定寺領の展開
- 2 禪定寺領の性格
- 3 周縁地域の動向

第2節 領域画定の構造

- 1 領域画定までの動き
- 2 禪定寺荘の上申・下達ルート
- 3 平等院執行の役割

第3節 領域形成の原理

- 1 境界の選定
- 2 住人間による領域設定

おわりに

注

第2章 領域型荘園の成立と奉仕者集団—禪定寺寄人を事例として—

はじめに

第1節 禪定寺領と禪定寺寄人

- 1 禪定寺寄人の由緒
- 2 禪定寺寄人の活動
- 3 禪定寺荘の形成過程

- 4 領主禪定寺と禪定寺寄人
- 第2節 山野の利用実態と領域形成
 - 1 禪定寺寄人の山野利用
 - 2 柚山一千町内での他荘住人の活動
 - 3 禪定寺寄人の活動範囲と荘域の設定

おわりに

注

第2部 伊勢神宮領における支配構造と集落の再編

第3章 伊勢神宮領遠江国浜名神戸の支配構造—大福寺・摩訶耶寺間本末訴訟を通して

はじめに

第1節 浜名神戸と地域寺院

- 1 中世の浜名神戸
- 2 大福寺
- 3 摩訶耶寺（真萱寺）

第2節 大福寺・摩訶耶寺間の本末相論

- 1 弘安年間の相論
- 2 正応年間の相論
- 3 康応・明德年間の相論

第3節 浜名神戸の伊勢神宮権力

- 1 土御門殿
- 2 修理権大夫
- 3 棚橋僧正
- 4 浜名神戸にみられる権限の分析

おわりに

注

第4章 伊勢神宮領遠江国浜名神戸故地の水利と村落

はじめに

第1節 浜名神戸と地域

- 1 中世の浜名神戸
- 2 中世史料に表れる地域社会

第2節 只木の水利

- 1 中世の只木

2 中世の水利体系の復原

第3節 岡本の水利

1 岡本の景観

2 水利体系の復原

第4節 平山の水利

1 中世の平山

2 水利体系の復原

おわりに

注

第5章 伊勢神宮の荘園支配と集落の成立

はじめに

第1節 遠江国蒲御厨の開発と水利

1 12世紀後半の開発と給主

2 蒲御厨内の用水と開発

第2節 浜名神戸の村落と水利

1 浜名神戸の在地構造

2 岡本郷の集落形成

3 岡本郷の開発

第3節 再開発と移住

1 荘官層の再開発

2 岡本郷から宇志への移住

3 宇志の村落構造

第4節 伊勢神宮による再開発政策

1 伊勢神宮内部の対立

2 祭主による荘園支配

おわりに

注

第3部 宗教的イデオロギー支配の変遷と地域住人の動向

第6章 荘園鎮守・荘園祈禱所と地域社会

はじめに

第1節 浜名神戸の支配拠点

1 浜名神戸立荘段階の拠点

2 現地荘園経営の拠点

第2節 浜名神戸中心地域の寺社と荘園鎮守

- 1 中郷（近世は三ヶ日村）の寺社
- 2 岡本郷の寺社
- 3 只木の寺社
- 4 地域寺院
- 5 荘園鎮守浜名惣社神明宮

第3節 荘園祈祷所大福寺の機能

- 1 寺院組織と経営
- 2 荘園領主と大福寺
- 3 大福寺と地域社会

第4節 荘園祈祷所大福寺と岡本郷

- 1 岡本郷内の集落形成
- 2 岡本郷住人と荘園鎮守・荘園祈祷所
- 3 寄進行為と再開発

おわりに

注

第7章 伊勢神宮領荘園における寄進行為の実態—遠江国浜名神戸を事例として—
はじめに

第1節 寄進行為にみる寺院機能の変遷

- 1 浜名神戸と大福寺
- 2 氏寺としての機能
- 3 氏寺から祈祷所へ

第2節 寄進行為にみる地域社会の変化

- 1 寄進行為の分析
- 2 寺院機能の浸透

第3節 伊勢神宮祈祷所成立の背景

- 1 伊勢神宮祭主周辺での神仏関係の変化
- 2 通海と浜名神戸・大福寺
- 3 祈祷所成立による地域社会への影響

おわりに

注

第7章補論 弘安の伊勢神宮御厨興行法の適用事例の検討

注

終章 本論文の成果と課題

第1節 本論文の成果

第2節 本論文の課題

注

初出一覧

【論文の要約】

本論文は、中世前期の人々の生活に、荘園制がどのような影響を及ぼしていたのか、また、荘園制という社会システムを、人々がいかに受容していたのかを、領域形成、集落の形成、宗教的イデオロギー、といった視点から、現地調査による方法を用い、荘園制と住人の生活空間を相互に関連した分析を試みたものである。日本中世の荘園制研究は、「立荘論」に見られるように「上からの編成」による視点で論じられる傾向となっている。このような視点からの研究が重視されることへの危機感から、本論文では、現地調査の成果を基にして、「上からの編成」による荘園制研究では描けなかった、新しい視点での荘園制を中世社会の中で位置づけることを目指した。

序章では、荘園制研究の中でも住人の生活と密接に関わる分野に注目した研究史の整理を行った。1点目の領域形成に関しては、住人間の山野用益の確保を発端として形成された荘園制的領域と、院近臣層主導による荘域の形成について、同じ荘園制的な領域形成過程を扱いながら接点が見えてこない。双方を結びつける議論は必要であると考えた。2点目の集落形成の議論では、1980年代以降の考古学的な調査成果により、13世紀後半～14世紀頃に、集落が広範囲に渡って再編されることが明らかとなっているが、文献史学からは、現在に至るまで明確な答えは導き出せていない点を指摘した。3点目は、近年の研究によって宗教的イデオロギー支配が限定的であったことが指摘されている荘園鎮守に関しては、イデオロギー支配の変容には、開発などに伴う集落の再編など、生活空間の変化が原因だと考えた。以上のような観点から、山城国にある平等院領荘園禪定寺荘と遠江国にある伊勢神宮領荘園浜名神戸という二つの荘園を対象にし、中世史料の分析を核に、現地調査に基づく水利景観・地域寺社・集落などの復原を通して、多角的な視点から見ていく方法をとった。

第1部は、住人間での山野紛争が、いかなる経緯で摂関家主導による領域型荘園の成立にまで至るのかを、権門寺社に奉仕する寄人や摂関家周辺の人物の動向を追うことで、その構造を明らかにしたものである。

第1章では、平等院領山城国禪定寺寄人と、近隣住人との間で起きた山野紛争を取り上げ、立荘論では解明されなかった中央と荘園現地の関係を通して、荘域の画定に至る仕組みを分析した。住人間の堺相論を契機として、禪定寺寄人からの訴えは、禪定寺・領家平等院を介して本所摂関家まで届けられ、それを受けて現地に派遣された摂関家の使者が、領域画定に至るといふ、上申・下達ルートから領域型荘園の成立過程が確認できた。その際、摂関家氏長者である藤原忠実へは、身にいた平等院執行成信の働きかけが大きかった。一方、荘園現地に目を向けると、杣山や谷を熟知する現地住人の生活実態が反映される形で、荘域は画定していった。本章の研究によって、院の近臣と同じような立荘推進勢力である平等院執行成信が、地域住人の要望を受け、住人の生活実態をそのまま反映させる形で、摂関家に働きかけることにより、領域型荘園が成立していたことが明らかとなっ

た。

第2章では、権門寺社に奉仕する寄人の杣山での活動に注目し、12世紀前後の平等院領禪定寺荘が、領域型荘園へと転換する要因を分析した。禪定寺荘には立荘以前から仕える禪定寺寄人が存在し、杣山一千町歩内での活動が保証されていた。禪定寺領杣山一千町歩内では、他荘住人による開発は、禪定寺寄人の活動の及ばない深山と呼ばれる場所で進められており、それが禪定寺寄人の活動範囲に接触する事態となったため、禪定寺荘の領域が成立したのであった。成立後も、寄人集団を統括していたと考える長者・下司一族が禪定寺の修繕費用などを流用するなど、荘内において強い発言力を保持していた。これにより、領域型荘園の成立の要因を、禪定寺寄人が自らの山野における活動範囲を守る目的で、摂関家氏長者藤原忠実と親密な間柄の平等院執行成信に働きかけ、禪定寺荘の領域を画定したことによると結論付けた。

第2部は、13～14世紀におきた集落の再編を、伊勢神宮による支配構造の分析と現地調査の成果を踏まえた、荘園故地の景観復原による再開発の事例という、領主と現地二つの視点から明らかにした。

第3章では、伊勢神宮による荘園支配の実態の解明をおこなった。伊勢神宮領遠江国浜名神戸内にある大福寺・摩訶耶寺間で起きた本寺末寺を巡る相論を考察することで、13世紀後半以降の浜名神戸において、複数の岩出流祭主家出身者による権力形態が存在していたことを明らかにした。今まで浜名神戸における支配構造は全く不明であった。その原因が、弘安年間の相論における裁許する主体が、「土御門殿」「祭主」「棚橋僧正」「棚橋殿」「修理権大夫」と多元化されていたことにある。別々の人物と認識されていた伊勢神宮側の人物を関連史料から分析することで、祭主大中臣定世・大中臣隆直・通海といった三名の岩出流祭主家出身者の人物に特定することができた。その結果、祭主権力には行使しえず、隆直・通海が行使できる独自の機能が存しており、伊勢神宮には、祭主権力とは異なる性格の権力が複数存在していたことがわかった。荘園現地で生活する人々にとっての領主伊勢神宮とは、組織の長である祭主と、岩出流祭主家出身者という、複数の上位権力が相互に補完しあうことで、支配が成立する存在であった。

第4章では、伊勢神宮領遠江国浜名神戸故地只木・岡本・平山地区での現地調査により、井堰・用水路・灌漑範囲の位置を特定し、水利景観の復原をおこなった。その成果により、只木地区の水利灌漑が慶長9年の検地帳の耕作地と一致することから、水利灌漑の淵源を中世に求めることができた。そして岡本地区の灌漑範囲には、荘官層の名田が数多く含まれていることから、浜名神戸が、伊勢神宮による荘園の経営拠点として、開発が進んでいたことを明らかにした。中世の文献史料がほとんどない平山地区においては、水利灌漑を復原することで、中世での生活空間の実態の解明を試みた。このような現地調査による成果は、文献史料の限定されている浜名神戸において、伊勢神宮による荘園支配と住人の生活空間の形成の関係を論じるうえで、貴重な情報として活用することが可能となった。

第5章では、13世紀後半～14世紀に起きた集落の再編という現象を、遠江国にある伊勢神宮領蒲御厨と浜名神戸での現地調査の成果を踏まえ分析した。まず蒲御厨の事例から14世紀以降に島畑の造営とそれに伴う集落の成立が伊勢神宮領であった時期に行なわれていたことを突き止めた。伊勢神宮による開発と集落の成立の事例を具体的に提示した浜名神戸では、現地調査による水利体系から、集落の成立は現地荘官層が共同で行う荒廃田などの再開発に起因していた。13世紀末から14世紀にかけて、伊勢神宮の許可のもと、荘内にある他郷への集団移住という形での再開発を行っていたのである。このような規模の事業が容易となったのは、伊勢神宮祭主定世・定忠を中心とする伊勢神宮権力が、伊勢神宮の祈祷所大福寺を媒介に、村落を単位とした荘園現地支配の実現を図ったことによる。荘園制的な支配の中で現地荘官・名主層が共同で開発をおこなうことで、13世紀後半以降に浜名神戸内の集落は形成されていったのであった。伊勢神宮による荘園支配が、中世後期へと至る新たな地域秩序を形成していったことを明らかにした。

第3部は、浜名神戸内における荘園鎮守と荘園祈祷所の機能の変遷を分析することで、地域住人に対する伊勢神宮による宗教的イデオロギー支配の実態を追求した。

第6章は、遠江国浜名神戸中心地域にある寺社を、現地調査により網羅的に整理することで、荘園鎮守と荘園祈祷所が並存していることをつきとめ、伊勢神宮による宗教的イデオロギー支配が転換していく要因を、荘園現地における集落の変化から分析した。浜名神戸では、領主伊勢神宮が、浜名惣社神明宮を荘園鎮守として設定し、荘園の支配を行っていた。しかし、13世紀後半に入ると、大福寺が伊勢神宮の祈祷所となることで、寺領内の検断権や殺生禁断を認められ、荘園現地での存在感が増してくるようになる。背景には、13世紀前半から始まる荘官・名主層の他国からの入植による、浜名神戸内の集落の再編成があり、これら入植者が、大福寺を信仰するようになったことによる。伊勢神宮は荘園現地での大福寺の威光を利用することで、荒廃した田畠の再開発事業を行うことができたのである。住人構成の変化によって、荘園領主である伊勢神宮による宗教的イデオロギー支配の転換が、13世紀後半以降に起こったと結論付けた。

第7章では、遠江国浜名神戸において、伊勢神宮の祈祷所となった大福寺に対する寄進行為を考察することで、伊勢神宮による宗教的イデオロギー支配と、現地住人との関係の分析を行った。13世紀初頭に、伊勢神宮神官一族の氏寺として建立された大福寺は、13世紀後半には、伊勢神宮の祈祷所として、祭主大中臣定世から庇護を受ける存在となっていく。背景には、まず祭主家出身の僧通海の影響により、祭主周辺で神仏関係の変化が起き、真言宗寺院への祈祷の需要が増えたことにあった。そして祭主定世が、浜名神戸内で影響力を持つ存在である大福寺を祈祷所とすることは、祭主による直接的な荘園支配を意味している。祈祷所に定められた大福寺へは、荘官・沙汰人層をはじめ、浜名神戸における広い階層から田畠地などの寄進行為が確認されるようになる。寄進行為が増加していく

要因は、大福寺に対する地域住人の信仰という視点以外に、地域住人が、大福寺を庇護している領主伊勢神宮祭主周辺との関係を築く目的があったと結論付けた。

第7章補論では、第7章の基となった拙稿に対する、海津一郎の批判に答えるべく、若干、史料の再検討を行った。

終章では、本論文の成果と課題を述べた。成果の1点目としては、これまでの立荘に関する研究では具体的に提示してこなかった、住人間による山野紛争を発端とした立荘に至る構造を明らかにできた。権門寺社と繋がる寄人の生活実態を、領域型荘園の成立の要因の一つに求めたことは、院や摂関家の近臣主導を重視する上からの研究を繋ぐ、新たな視点からの議論を展開できた。2点目は、13世紀後半～14世紀に起きた集落の再編に関して、現地調査による景観復原を行うことで、文献史料から新たな見解を導き出すことができた。新しく成立した集落は、近隣の集落に居住する荘官・名主の一族が入植する形で誕生しており、村落の形成が、伊勢神宮による荘園支配に影響を与えながら、形成されていたことを明らかにした。3点目の13世紀後半に浜名神戸において荘園鎮守に代わる荘園祈祷所が成立するという、宗教的イデオロギー支配の転換が起きた要因を、現地調査によって集落の再編成に求めたことは大きな成果といえる。今後の課題としては、1点目が荘域と住人の生活空間の関係、2点目がGISなどによる現地調査成果の活用方法、3点目が公家・武家政権といった政治的側面の3点をあげた。